

(十六) 承前

「おみごと！」

そう言ったのは、右近であつた。

右近は、そこに立って、右手の人差し指で、自分の鼻の頭を差している。

そこにくつついている飯粒が、みごとにふたつに割れていた。

「わあっ」

という歓声が、見物客の間に湧きあがつた。

もちろん、見物客のほとんどは、飯粒がふたつになっている様子までは見えないのだが、前列にいる何人かには、かろうじてそれが見えている。

「おみごと」

そう言った右近の様子と、前の見物客数人があげた声に、何が起こつたのか、周囲の見物客たちも理解して、声をあげたのだ。

緊張してなりゆきを見守っていた見物客にとっては、絶妙の間をとって、右近が「おみごと」の声をあげたのである。

呼吸を止めていた彼らにとつては、溜めていた息を吐き出す絶好の機会であつたのである。

伝之進は、右手に刀の柄を握って、呆然としてそこに突っ立っている。

自分が今、何をされたか、伝之進にはわかつていた。

本気で、斬りにいったのだ。

それまでは、遊んでやろうという気持ちであった。

右近に「やめてくれ」と言わせれば、それでよかったのだ。

が、第二手がかわされてからは、斬りにいった。

鼻の頭か、頬を傷つけてやるつもりであった。もしも、それが深手になってもしょうがない。

が――

その、三手、四手、五手がみなかわされてしまった。

これでは面目がたたない。

殺す――

そういう覚悟をした。

右近の頭部を真つぶたつに割る。

そう肚をくくって、斬り下げたのだ。

深く踏み込んだ。

右近が後ろに退がっても、額か鼻には刃が届く。

左右に逃げたのなら、いずれへ逃げて、右口に剣先が潜り込む――そういう攻撃をしたので

ある。

右近は、退がった。

しかし、退がりきれない。

剣先が、額を割る。

そう思った時、

きいん、という音がして、剣先が折れて飛んだのである。

何をされたか。

それはわかっている。

右近が、右手の指二本——人差し指と中指で、落ちてくる刃の横腹を叩いたのだ。

それで、剣先が折れて飛んだのである。

手の指で、落ちてくる刃を横から叩いて、折る、などということが、本当にできる人間がいるのであろうか。

さる。

何故なら、今、目の前にいる如月右近が、それをやってのけたからだ。

その漢は、細い眼をさらに細くして、笑いながら目の前に立っている。

ここで、剣を折られたなどと、もんくは言えない。

自分は、自分の剣を使っていいかと右近に自ら申し出たのである。

その剣が折られたのだ。

しかも、素手で——

剣を頭上で折り、ちようどいい長さにして、鼻の頭の飯粒を斬らせたのだ。

神業かみわざという言葉があるが、それ以上——神技しんぎ以上の技と言えた。

伝之進も、そこそこには腕がある。

あるだけに、如月右近のやってのけたことが、どれほどのことかわかる。

「それがしの負けじゃ」

それだけを言った。

あとは無言であった。

口を閉じたまま、折れた刀を鞘さやにもどした。

懐きんちやくから巾着を取り出し、中から六十文を取り出し、それを黙ったまま石の上に置いた。

右近も、無言で六十文を取り、懐へおさめた。

礼も言わなければ、褒ほめもしない。

これはもらえませぬなあ――

むろん、そういう言葉も口にしなかった。

どういふ言葉を口にするにしろ、畠山伝之進の自尊心を傷つけることになるからだ。

伝之進は、黙したまま右近に一礼して、その場を去った。

松の根元に、折れた剣の先がひとつ、転がっているだけだ。

伝之進は、それを拾うことなく、去ったのである。

伝之進の姿が見えなくなるところで、見物客たちが、再び声をあげはじめた。さすがに、伝

之進がいるところでは、今、右近がやってのけたことへの感想を口にするのははばかりなもので

あろう。

「じゃ、凄すこ」

「今のは、如月さまが、わざと斬らせたのであろうな」

「そうに決まっているではないか」

そのようなざわめきの輪の中から、ふたりの人間が歩み出てきた。

ひとりには、白い道服の如きものを身に纏い、背に二胡を負って、右手に杖を持った人物であった。

髪の毛が白い。

遊齋であった。

もうひとりには、三十代半ばくらいであろうか。

縞物の上に笹竜胆の紋の入った黒い羽織を着た二本差し。

きれいに月代を剃った頭の上にのせた鬘が短い。

眉が濃く、眸が大きい。

唇の両端が、そこに一本ずつ二本の楊枝でも啞えているかのように、ちょっと下がっている。

「おう、これは遊齋先生——」

右近は、遊齋に向かって小さく微笑してみせた。

「間宮殿もおそろいで……」

黒い羽織を着ている人物が、間宮林太郎であった。

「あいかわらず、みごとなお腕まえですね」

遊齋が言った。

「いや、右近先生、このようなまねをせずとも、よいでありましょうに——」

間宮林太郎が言った。

「むろん銭が欲しいわけではない。しかし、いささかたいくつでな……」

右近は言った。

「今日は、そのたいくつをどうにかしてさしあげられるのではと思ひ、やってきたのですが……」

林太郎が言う。

「おう、それはありがたい」

「その腕を拝借したいと思つていのです」

「だれを斬ればよいのだ」

ふいに、右近が声をひそめてそう言った。

「しっ」

と、遊齋が、右近の唇に右の人差し指の先をあてた。

声をひそめはしたが、近くににいる人間には聞かれるおそれがあるの言うまでもない。

「用件は？」

右近が言う。

「ここでは、いささかまずい。場所をかえませんか、右近先生——」

林太郎が言うと、

「腹が減った」

右近は、右手を軽く腹にあてた。

何か食べながら、その用件というのを聞こう——

そういうことらしかった。

(十七)

床の間つきの、六畳の部屋であった。

そこで、右近が対面しているのは、遊斎と林太郎であった。

三人の前に、膳が置かれている。

その上に、漆塗りの重箱と猪口が並んでいる。

重箱の中には飯が盛られていて、その上にたれにつけて焼かれた鰻の蒲焼きが載っている。

鰻は、今運ばれてきたばかりで、湯気があがっている。

膳とは別に、盆がひとつ、畳の上に置かれていて、そこに、爛のされた酒の入ったちろりが置かれている。

鰻を甘からく煮たものを肴にして、三人で酒を飲んでいるところへ、鰻が運ばれてきたのである。

障子窓を開ければ、すぐ下が神田川だ。

神田川沿いにあるうなぎ屋——森崎屋の離れた。

ここならば、他人に聴かれたくない話ができる。

床の間には、勢いのある筆で、天へ向かって這いのぼってゆくような鰻の絵が描かれていて、そこに、

のたりくたりと

長く生きたし

と、短い讚がそえられている。

風来山人ふうらいさんじんという名がひとつだけ入っているとところを見ると、自分の描いた絵に自分で讚をつけたものであろう。

風来山人——平賀源内の戯作者げさくしやとしての名前であった。

「うなぎ屋を急せかしちゃあいけねえと言うが、待った分ぶんだけうまそうじゃ」

右近が、重箱の中を覗のぞき込みながら言う。

「源内先生が、十日に一度は通つてる店でしてね。三月に一度は、御相伴ごしょうばんさせていたでいるのです」

間宮林太郎が言う。

三人は、これまで、酒を飲みながら、ありた屋の話をしていたのである。

蒲焼きが出てくる前に、ありた屋のことについて、ひと通りのことは、話し終えていた。

「噂程度うわさには、おれも御殿山でのことは小耳こみみに挟はさんでいたんだが、その裏にこんな話があったとはな……」

右近が、杯を手を取って、中に入っていた酒を、ぐびりと飲んだ。

「で、おれに、何を斬きらせたいんだい——」  
右近が問う。



「おれに頼む以上は、相手はそれなりなんだろう？」

「人ではないものが、相手になるかもしれない——」

間宮林太郎が言った時には、右近は、もう箸はしを右手に持って、重箱の中に伸ばしていた。

「ほんとかね？」

右近は、箸を止めて、遊齋を見やった。

「は？」

遊齋は、白い顎あごを小さく引いてうなずいた。

「聴かせてくれ」

右近は、そう言って、箸で飯ごと鰻を取って、それを口の中に放り込んだ。

(づづく)